

助産婦の「顔」が見えない

寺田 恭子

大阪市立助産婦学院

「助産婦」という職業は 認めてもらっていない？

私は助産婦学校の教員をしています。学生が卒業して新生入生を受け入れる準備もそろそろ佳境に入ってきた3月の末に、ぼんやりと家でテレビを観ていました。その時画面には、ある両親がT医大病院に損害賠償を求めた訴訟の判決のニュースが流れていました。わが子が出生後の入院中にうつぶせ寝にされていて、吐いたミルクを吸い込み窒息して脳性麻痺になり、7か月後に死亡した事件の判決でした。東京地裁は看護婦が継続的に観察する義務を怠ったと判断し、病院側の責任を認めて4800万円の支払いを命じたとのことでした。そのニュースの中で、ある医大の小児科の教授がコメントを述べていました。

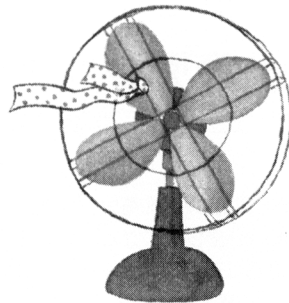
この裁判は看護婦の過失が認められての損害賠償判決だったのに、なぜ当の看護婦や助産婦のコメントは求められないんだろう、と私は感じずにはいられませんでした。別のワイドショーでは、訴えた母親が「ガラスごしに自分の子どもの様子がおかしかったので、助産婦にインターホンで声をかけた」と、助産婦が関わっていたことをはっきりと証言していました。それにもかかわらず、当事者の助産婦のコメントは求められないのです。

数日後、夜中にNHK衛星放送で流されるアジアのニュース番組を見ていた時のことです。ベトナムでは妊婦健康診査の受診率が低いと、妊産婦死亡・乳児死亡が減少しないことを報じていました。このニュースの中で、このことに対して産

婦人科医師と助産婦がそれぞれコメントをしていたのに驚きました。「助産婦の絶対数が少ないことも問題である」と、この助産婦はしっかりと自分の考えを述べていました。助産婦の数が少ないことをマスコミに報道される、ベトナムの助産婦と日本の助産婦と、どこが違うのでしょうか。ベトナムでの国民の助産婦に対する認識はどのようなものなのでしょうか。

このようなことはテレビに限ったことではないように思います。ゴールデンウィーク前に買った雑誌でも、助産婦の存在は世の中に認めてもらえていないなあと思うことがありました。買った雑誌は『anan』です。SMAPの木村拓哉と外人女性モデルが抱き合っている写真が表紙で、中にも2人の写真が6ページにわたり載っていました。10代後半から20代前半をターゲットにした華やかな雑誌です。「セックスできれいになる」という特集が組まれていました。この特集は繰り返し行なわれていて、毎回好評のようです。

毎回、何ページかを割いて避妊や性感染症などに関する情報の欄があります。この記事でも登場するのは、いつも医師です。助産婦は一人も出てきません。もしこの記事に助産婦が登場していれば、これから妊娠・分娩・育児を行なう可能性の高い年代の女性たちに、助産婦の存在を知ってもらえる絶好のチャンスになったのではないのでしょうか。たとえ木村拓哉見たさに買った購入者が大半であったとしても、ぺらぺらとページをめくっているうちに助産婦の載っている記事を見て、“助産婦の仕事は分娩の介助だけでなく、避妊や



Toshiko

性感染症の相談も受けているんだ”，と知ってもらうことができると思いました。

助産婦学校の教員をしている立場からも考える
特に、高校生や看護学生に助産婦の存在を知ってもらいたいです。

前向きで知性的な助産婦がテレビや雑誌に登場して、てきぱき仕事をしている姿や、的確なコメントを述べている姿を、世間の人々に見てほしい。「助産婦ってカッコイイ」と思ってほしい。そしてたくさんの若い人が「私も助産婦になりたい」と思い、大学で助産学を専攻したり、助産婦学校に入学してくれたらいいのになあ、と、夢を描いています。

妊娠・出産・産褥期だけでなく女性の一生を通じて、女性にとって心強い味方となる私たち助産婦がいることを、もっと知ってもらいたい。誇りある仕事に就いているのだから、社会の中に堂々と「顔」を出していきたいと思います。では、私たちはどのようにすれば、私たち助産婦の存在や仕事を人々に知ってもらえるのでしょうか。

社会の動きに対応しよう

しかし、一方的に「人々に存在を知ってほしい」というだけでは、この忙しい世の中では振り向いてはもらえないと考えます。振り向いてもらえない理由の一つに、私たちが社会の動きに迅速に対応できていない点もあるのではないのでしょうか。

例えば、臍帯血移植のための臍帯血バンクに対しての私たちの対応がスムーズでなかったように思います。昨年頃より臍帯血移植のことがテレビ

や新聞で報道され、多くの人々の知るところになったにもかかわらず、助産婦職全体として職能団体等から意見を聞くことがありませんでした。現場で働く助産婦の意見をまとめて、国や社会に発表していこうという動きも感じられませんでした。臍帯血を採取することや胎盤・臍帯、臍帯血を提供してくれる母子に最も身近な医療従事者として、公的臍帯血バンク早期設立に対して賛成するのか反対するのか、もっと早くに意見を述べるべきだったのではないのでしょうか。

私個人としても、臍帯血移植や公的臍帯血バンクのことを十分知らないため、はっきりと意見が述べられる状態ではありません。仕事が忙しいのをいいことにして自分を反省しております。

私は今後、助産婦学校の教員として、カリキュラムは目一杯で大変だけど、社会の動きに敏感な助産婦を、学生と一緒に目指していきたいと思っています。社会にアンテナをはりめぐらした、いい意味でミーハーな助産婦の仲間を増やしたい、と思います。新しいもの、変わったもの、そしてよいものに興味を持ったら、どんどん追究していくような助産婦に、自分の生活を楽しみながら仕事をする助産婦に、私も学生と共にいたいと思います。

テレビや雑誌を見ながら、ぼんやりととりとめのないことを考えているうちに夜が更けていき、授業の準備もまだ残っているのに1日が過ぎてしまいました。

次は、同じ大阪で助産婦教員として日々奮闘している佐藤美香さんをご紹介します。